

天台智顛の地論撰論学について

池 田 魯 參

智顛が『十地経論』や『撰大乘論』などの唯識系の諸教学をどのように解したかという問題は、天台教学が成立する背景として、重要な教理史的契機を含むものであると、私は考えるのであるが、従来学会で行われた有力な学説に照らしてみると、必ずしも一致をみているとはいえない。

例えば、安藤俊雄氏の『天台性具思想論』（昭和四八年、法藏館）第四章「唯識系諸宗との対決」第二節「地論撰論宗批判」では、智顛の批判点を次の三項目に整理している。

第一は、一般に唯識説はいわゆる四句推檢によって、すでに対治されたはずであるところの戲論的性格をおびるものである。

第二に、智顛は唯識説に伏在する有執を指摘している。

第三に、智顛は唯識説を一般に別教に配属せしめている。

というように説き、三項目それぞれを詳説した後、その結論として次のように結んでいる。

しかるに天台教学が南岳慧思と異なつて徹底的に法華経主義を立場とし、ことに唯識宗に対して対決的態度をとつた（後に知られ

るようにこのような態度だけではない）ことは注目すべき点である。この態度が後世、中国天台の教学上の性格を決定する重大な契機となつたわけである（一〇三頁）。（この考え方は慧思教学、智顛教学をどうみるかという点と関わり、種々の問題をはらんでいると考える）。

一方、佐々木憲徳氏は『天台縁起論展開史』（昭和二八年、永田文昌堂）で、安藤説とは大分趣きの異なる見解を示す。

要するに天台は唯心唯識の縁起法門に対して解明の仕方如何により、これを円教位に接続せしむることも、また別教位にくだすことも可能であると見たものであろう（四三頁）。

と説き、さらに、

このゆえに地撰一論師の固執せる迷想を除遣せば、唯心唯識の縁起見解も亦た円教位の法門にまで、聯系をたもち得るものとなし、てよいこととなる（四五頁）。

と説き、智顛が「如来蔵を仏性の異名」と示すような、かかる解釈は、円教位の法門所談に属するのであるが、しかし如

来藏についての別教当分の解釈としての文証は容易に見出せない（四六頁）。（但し、四一頁には、「地論撰論師等の縁起論は別教位の法門として取扱う所存のように思われる」と記す。）と結んでいる。

要するに、安藤俊雄氏は、智顛の地論撰論学を対決的に否定的な立場でみられ、それを消極的に評価しているのであるが、一方、佐々木憲徳氏は、これを総合的に肯定的な立場で、智顛の地論撰論学を積極的に評価しようとしているのである。両学説には相応の根拠があり、いずれも傾聴にあたり説であると思うのであるが、今日の課題としてみて、果してどのように理解すべきであろうか。

実はこの問題を究明することによって、智顛が『起信論』を知っていたはずであるのに（同時代の慧遠も吉蔵も『起信論』を引用しており、この人たちの教学と天台教学は相当の交渉があったということが今日では解明されている）、わづかに『小止観』に修行信心分の説を引用する一例があるだけで、『起信論』の名を指示することすらもなかった理由が何であるのかを究明することにつながるはずであり、さらには伝統的に日本と中国の天台宗で重んじられて来た、南岳慧思撰と伝える『大乘止観法門』の教義思想を、天台教学史の系譜のなかでどのように位置づけるか、というような問題を究明することにつながる課題なのである。そのようなわけで、智顛の教学

における地論撰論学の実態を正しく把握することは、基礎研究として重要な意義をもつものであると考える。

考察にあたって先ず、智顛在世の当時は、地論撰論の研究が盛んな時代であったことを思い起こさなければならぬ。大本『四教義』に、「三論師」と共に「地論師」「撰論師」という呼称が頻出することによっても知られることであるが、このことと関連して、静影慧遠の『大乘義章』卷三末に「八識義」を集成していることや、吉蔵の諸著に、地論師、撰論師批判が種々にみられることなどを合せて考慮してみると、智顛の当時は、地論撰論学が有力な学統を有する学派として盛行しており、それらの学説をどのように理解するかということは、当時の仏教界では無視できない重要な課題であったことが知られるのである。

例えば、智顛が『玄義』卷九上の顕体章段で、
今時学_レ地論一人、反_レ道還_レ俗、竊_レ以此義、偷安_三莊老_一（正蔵三卷七八八上）

と記す例は、北周庾仏で遷俗した地論宗の学僧が、老莊思想によって仏教を解したことを伝え、そのような教学理解の誤りを指摘したものである。『玄義』の同じ段では又、

如_三地論_二有_三南北_二道_一、加復撰_レ大乘興、各自謂_レ真、互相排斥、令_レ墮_三負処_一（七九二上）

と記す例などがあるが、これは地論撰論両宗の歴史的背景を

指摘したものである。

『十地経論』は、北魏宣武帝の永平元年（五〇八）四月上旬に勅して太極殿において、菩提流支と勒那摩提の二人が翻訳したが、二人は訳出上に異を唱え、各自一本を訳出したといわれ、そのために勒那摩提の訳本に教権を認められた地論師を、相州（河南省安陽市、又名鄴）南道派と唱し、菩提流支の訳本にしたがった地論師を、相州北道派と称して、地論宗は南北の二派に分裂したと伝える。

その後、北齊廢仏で江南に亡命した曇遷などは、陳天嘉四年（五六三）春三月、広州制旨寺で真諦三蔵が翻訳した『撰大乘論』『釈』の学説を北地に伝来したが、その後撰論宗は地論宗北道派を吸収して、以後、南道派と対立することになるわけであるが、そのような両宗の歴史的経緯を、この記事は暗喩しているのである。

一方、『別伝』が伝えるところによれば、智顛は法緒の下で出家した後、慧曠から方等を学んだということである。この慧曠という人は、『統高僧伝』卷一〇（正蔵五〇卷五〇三中）が伝えるところによると、僧宗、慧愷などと共に真諦から『撰大乘論』『唯識論』などを学んだ人である。慧曠は慧思とも親交があり、光州大蘇山の慧思の学場に来て、智顛が金字般若を代講した時には臨席して、智顛の学業を慧思と共に讃嘆したと伝えている。このように智顛と慧曠の関係は長

天台智顛の地論撰論学について（池田）

期間にわたり、智顛が慧曠などを介して、早くから撰論などの唯識系仏教に接触したであろうことは、充分に考慮されなければならぬだろう。

このような観点で、改めて智顛の著述のなかに当たってみると、『地論』『撰論』の引用は、『次第禪門』などの初期の著述には全くみあたらないが、後期の『維摩玄疏』『四教義』をはじめ、三大部や『金光明玄義』『四念処』などの諸著では、案の上極めて重要な意味をもたされて引用され批評されていることが知られるのである。

そこで、多数にのぼる智顛の引用例を、便宜上批評内容の面で分類してみると、次のような五種の観点で整理することができると思う（勿論、問題の性格上、引用例によっては内容が各項相互に重複する場合は当然である）。

- [1] 語釈や教義解釈の資料として引用される例。
 - [2] 心識説について引用する例。
 - [3] 教判に関する引用例。
 - [4] 修行論について引用する例。
 - [5] 行位説に関して引用する例。
- 先ず、[1] 語釈や教義解釈に関わる引用例。
『玄義』卷二下の境妙段に次のように出る。

撰大乘明二十勝相義、咸謂深樞、使二地論翻宗。今試以二十妙、比之、彼有所漏。且用理妙、比依止勝相、明不思議因縁、

四五

四句破ヲ執。豈留黎耶、庵摩羅、為依止耶（七〇四下）

すなわち、『撰大乘論』の十種勝相と『法華』の十妙を対照してみると、例えば十妙の第一境妙と、十種勝相の第一依止勝相とを比較すれば、『撰論』は随情智の方便である阿黎耶識が一切法の依止であることを論じているが、約教・約行や、四悉檀に普遍する道理を説かない。したがって因縁觀も、法華の不思議不生不滅の説には及ばないものであると、智顛はいう。

次に、〔3〕教判論に関する引用例。

『文句記』卷九上に、

地人呼華嚴為三円宗、法華為三不真宗（正蔵三四卷一二五下）

と引き、『四教義』卷一に、

地論四宗、五宗、六宗（正蔵四六卷七二三中）

と紹介するが、『玄義』卷十の教相玄義では、南地の三種教判と、北地の七種教判説を紹介し、四宗判は仏駄三蔵と慧光が用いた、(1)因縁宗、(2)仮名宗、(3)証相宗、(4)常宗からなる四宗であり、五宗判は、護身自軌大乘が用いたものを承け、四宗に華嚴の法界宗を加えたものであるという。六宗判は、耆闍凜師が用いたもので、四宗に法華の万善同帰の真宗と、大集法界円普を説く円宗を加えたものと記す。「護身自軌大乘」は不明であるが、その教説内容から推測すると、他と同よう地論宗に属する人たちの教判説であることが知ら

れる。又、『四教義』卷一二に、

通申大乘經論者、如三地持論、撰大乘論、唯識論、中論、十二門論等、並是通申諸大乘經、所明別円兩經也（中略）別申大乘經論者、如三地論、別申三華嚴經、別円兩教（七六八中）

と出る、撰論通申、地論別申の説なども教判に関する引用例である。

次に、〔5〕行位説に関する引用例。

『玄義』卷四下の位妙段に、

十地論、撰大乘論、地持論、十住毘婆沙論、大智度論、並積菩薩地位、而多少出沒不同（七三二下）

と記し、

地撰等論判位、別叙二途、義不兼括（七二六中）

と批評する例などは、その一例である。

ところで、後に残した〔2〕心識説と、〔4〕修道論に関する引用例は、地論撰論兩宗の論争点に関わるもので、智顛の引用批評も精緻を極めている。

〔2〕心識説に関する引用例。

『摩訶止観』卷五上の観不思議境段に、

若無心而已、介爾有心即具三千。亦不言一心在、前、一切法在、後。亦不言一切法在、前、一心在、後（中略）若從一心生一切法者、此則是縱。若心一時含一切法者、此即是橫。縱亦不可、橫亦不可。祇心是一切法、一切法是心故、非縱非橫、非一

非異、玄妙深絶、非識所_レ識、非言所_レ言、所以稱為不可思議境（五四上）。

と記して、一念三千、一心一切法、一切法一心の不可思議境を解説した後に問を設け、次のように答えている。

答。地人云。一切解惑真妄、依持法性、法性持真妄、真妄依法性也。攝大乘云。法性不_レ為_レ惑所_レ染、不_レ為_レ真所_レ淨、故法性非_レ依持、言_レ依持者、阿黎耶是也、無没無明、盛持一切種子。若從_レ地師、則心具一切法。若從_レ攝師、則緣具一切法。此兩師各執一辺（五四上中）。

この後につづけて、法性を心に喩え、黎耶を夢に喩えて、法性があるいは阿黎耶識（無没無明）が、一切法を生ずるという、地論師、あるいは攝論師の説は一辺の説にすぎないことを論じ、四句に心を求めるも不可得であると説明する。

このような例に照らしてみると、智顛の觀心法が成立する背景に、地論撰論学の教學論争が反省材料として大きな役割をになつていたことが知られるのである。

又、『玄義』卷五下の三法妙段で類通三識を説く個所では、地論撰論両宗の論争点を含めて次のように記している。

類通三識者、菴摩羅識、即真性軌、阿黎耶識、即觀照軌、阿陀那識、即資成軌。若地人明_レ阿黎耶、是真常淨識。攝大乘人云、是無記無明隨眠之識、亦名_レ無没識、九識乃名_レ淨識、互諍。（七四四中）

天台智顛の地論撰論学について（池田）

指摘されるように「地論師（南道派）は、八識を極果（黎耶真識）としたが、攝論師（北道派も）は、八識を生死の根本（妄識）であると考え」（七九四下）、七識の我執識や、八識の種子識に対し、真如そのものを清淨無垢の第九識と認める。

そして先の引文の後に続けて智顛は、善惡無記の三識が、同人の三心として顯われるように、三識の場合も同ように、一法を三識と論じ、三識は一法を論ずるに外ならないとして次のように説いている。

若阿黎耶中、有_レ生死種子、熏習增長、即成_レ分別識。若阿黎耶中、有_レ智慧種子、聞熏習增長、即_レ成_レ道後真如、名為_レ淨識。若異_レ此兩識、祇是阿黎耶識。此亦一法論_レ三、三中論_レ一耳。撰論云、如_レ金土染淨。染譬_レ六識。金譬_レ淨識、土譬_レ黎耶識。明文在_レ茲、何勞苦諍（七四四中下）

なかに引用されている『撰論』の金藏土譬は必ずしも智顛が解釈したような意味ではないが、外にも『金光明玄義』卷上（正藏三九卷五下）、『維摩經玄疏』卷五（正藏三八卷五三上）、『四念処』卷三（五七二上）などにも引用され、『金光明玄義』などでは「此即円説也」と結んでいるほどである。『玄義』はさらに先の文に続けて、

下文譬如_レ有_レ人至_レ親友家醉_レ酒而臥、豈非_レ阿黎耶識。世間狂惑分別之識起、已遊行以求_レ衣食、豈非_レ阿陀那識。聞熏種子稍起增長、會_レ遇親友、示_レ以_レ衣珠、豈非_レ菴摩羅識。菴摩羅識名_レ無分別

智光。若黎耶中有三此智種子、即理性無分別智光、五品觀行無分別智光、六根清淨相似無分別智光、初住去分真無分別智光、妙覺究竟無分別智光（七四四下）。

と記し、『法華経』五百弟子授記品の衣裏繫珠喩の觀心釈として三識を配し、円教の六即説に配当して阿黎耶識の修道的な行くへを示すのであり、このような理解の仕方は、智顛の一貫した態度であるといえる。

因みに、日下大痴氏は『台学指針』（昭和十一年、百華苑）所取「天台教義上に於ける起信論の地位」において、

案ずるに台家の意は立識の八九を、ただ是れ法相の差排施設なりとし、これに由りて其の名相に拘泥して偏ましく執すべきでない。若し直ちに其の法体を顯さば、則ち染淨二なく因果別なきを円実の教意とし、撰論金藏土の譬喩に依りて、他の地撰二家弘論師の對抗を調停し、以て自家の主張を拡大せんとするものである。蓋し彼の賢首一家に於ける性相融会の成功と相前後して、華天一乗中の雙璧と謂ふべきもの歟（二六〇頁）。

と最大の評価を与えているが傾聴すべき見解であると思う。

〔4〕修道論に関する引用例。

『玄義』卷三下の三諦の境妙を説く段に、

地論師云、縁修顯_二真修、真修発時不_レ須_二縁修、前而智即是縁修、後智発時即是真修、真修具一切法、不_レ須_二余也、即是義（七一四上）。

と説く。真修に一切法を具することを認めても、縁修にそれを説けない地論師の修道論は円教の三智と異なるという意味で、この後にすぐ「円三智者」と続く文勢から解る。

又、『玄義』卷五下の三法妙段では、歴別に三法を明す個所で、別教の三法に相当するものとして『撰大乘論』の三乘義を引用し、理乘、隨乘、得乘の三意が三軌に似たものであるが、前後に融即しない点があると難じている。この文の後には円教の三法が続くので、撰論師の修道論が別教の三法義として位置づけられていることは明らかである。殊に阿黎耶識に真如を認めない撰論師の立場が批判されており、智顛が地論宗南道派の説に同調した一面は処々に認められる。慧遠の『十地経論義記』などに闡明されるが、『大乘義章』の『八識義』に、智顛の主張とほとんど同じ説が、『起信論』を中心にして説かれていることは注意すべきであろう。

真中分_二一。一阿摩羅識。此云_二無垢。亦曰_二本淨、就_レ真論_レ真、真体常淨、故曰_二無垢。此猶是前心真如門。二阿黎耶識。此云_二無没。即前真心、隨_レ妄流轉、体無_二失壞、故曰_二無没。故起信論言、如来之藏、不生滅法与_二生滅一合。名為_二阿黎耶一（正藏四四卷五三〇中）。

（駒沢大学助教授）